海蔵寺だより

第22号
令和3年12月
発行

皆さま、本年中は大変お世話になりました。今年は各所の補修や屋根の塗り替え、そして法戦式など数々の出来事がございましたが、檀家の皆様には変わらずお世話になっております。また間もなく新たな一年が始まって参ります。来年もどうぞよろしくお願い致します。

さて今回は、普段のお経においてその後に必ず読まれる、「回向」について特集致しました。

「回向（えこう）」 ―― 読経の功徳（くどく）の向かうさき

回向（えこう）とはもともと「廻向（えこう）」と書き、訓読すると「廻（めぐ）らし向ける」となります。その起源は、古代のインドまで遡ります。

仏教では古来インドの原始経典の時代から、読経や布施、善行によって得られた功徳は父母や兄弟にめぐらし向けることができると信じられてきました。インドから発展した大乗仏教の時代になると、めぐらし向ける先は一切衆生（いっさいしゅじょう）（動物を含む一切のもの）に拡大され、仏事法要の後には、これに具体的なお祈りの内容などを付けた「廻向文（えこうもん）」が必ず読まれます。その一番身近な例が、今日（こんにち）皆さんと共に故人に捧げる年回供養などです。

仏教では、「これをすればこんな事が起こる」と経典や儀式法で明言されている内容は、意外と多くはありません。例えば「供養でお線香をあげたから、故人にもお線香の香りが届いているのか？」と突き詰められると、僧侶も実際に亡くなったことは無いので分からないのです。

そこで出てくるのが、仏教の因果の考え方です。仏教では世界のすべての出来事は原因と結果が無限に連なって起こっていると考えます。これが、いわゆる「仏法」です。そして私たちは、その流れの中で生まれ、また流れに帰っていく。その理の全てを理解することは私たちにはできません。死後の事ももちろん、知っている者は1人もいないと思われます。供養も例に漏れずその一つで、お線香を立てたりお膳を備えたりしても、故人が直接に受け取っているか、私たちに知る術は無い。しかし、風が吹けば桶屋が儲かる、というように、供養の効き目も巡り巡って、絶対にその人の元に届いていますよ、と言い切るのが、今日の我々が説く供養の考え方なのです。（もともとの供養の意味からは少し変化しています。）そして、その人の為を思って供養することで起こる、または始まる、いいキッカケ・原因が、功徳であると言うことができます。

そして供養の最後に、「このお経をお唱えしてお供物をお供えしましたが、その功徳をあなたに送ります、少しでもあなたの助けになりますように」とお祈りして締めくくる、それが、廻向文です。

供養に欠かせない、大切な「まとめ」の部分です。

法戦式（ほっせんしき）

去る10月17日、海蔵寺において「法戦式」という一大行事が厳修されました。

修行を終え、現在海蔵寺の徒弟として勤めております私が、副住職となるために経る行事の一つです。

法戦式で私は、行事の中心となる首座（しゅそ）という役を勤めました。首座は本来、集中修行期間において修行僧の筆頭となる役で、法戦式では声を割れんばかりに張り上げて、他の修行僧と仏法についての問答を戦わせます。僧堂以外では基本的にこの修行僧の役を、ほかの御寺院様をお呼びして勤めて頂きます。今回は、31 名の御寺院様と、59 名のお檀家さんに御縁を頂く事ができました。ご多忙の中をお越し下さった方々には、只ひたすらに深く感謝申し上げる次第でございます。以下、写真にて式の様子をお伝え致します。

たくさんのお檀家さんにご参加いただきました！

法堂(本堂)に並ぶ御寺院様方

ご参加頂いた全てのお檀家さんにご焼香いただきました。

お隣のなかよし保育園が完成いたしました。

今年の春より全改築をしておりました、お隣のなかよし保育園が先月 30 日に無事に完成・開園致しました。ご協力頂いた近隣の方々にはこの場を借りて、心より感謝を申し上げます。

海蔵寺にお越しになった際には、外観・機能ともに大きく進化を遂げた園舎にぜひ、目を向けてみてください。

編集後記

さて今回、二回目の海蔵寺だよりを作らせて頂きました、海蔵寺の徒弟にして長男・滉基です。

今年は相変わらずのウィズ・コロナで自粛のムードが漂う中、お授戒へのお招きや当寺の法戦式、保育園の改築や屋根塗り替えなど多くの出来事がございました。

忙しすぎるのも問題ですが、何もしないでいるのもまた大きな問題だと私は思います。今年はお陰様で忙しい一年を過ごすことができました。来年もまた「適度に」忙しい一年にしていかねばと思っております。「来年」は毎年来ますが、令和４年はこの一度しか来ることはありません。無駄にしないよう、気張って参ります。来年も、どうぞよろしくお願いいたします。　　合掌